

調べてありますが、ここにはデータをもっておりません。

7. 家兎リンパ球への紫外線照射による免疫抑制効果

(腎センター外科)

○水口 潤・早坂勇太郎・高橋 公太・東間 紘・阿岸 鉄三・太田 和夫

プラスマフェレーシスを実施するにあたり、すでに産生された患者血漿中の抗原、抗体や抗原抗体複合体を除去すると同時に、抗体産生に関与している患者リンパ球の反応性を減少させ、免疫反応を抑制することも重要な問題である。現在、リンパ球の反応性を抑制する目的で、主にステロイドホルモンやアザチオプリンなどの薬剤が使用され、その有効性が認められている。しかし、その副作用により使用量が制限され、十分な免疫抑制効果が得られない症例も少なくない。

われわれは、リンパ球の反応を抑制する物理的な方法の1つとして紫外線を取りあげ、*in vitro*での紫外線によるPHA反応ならびにMLC反応の抑制効果につき報告して来た。

今回は、ヒツジ赤血球で免疫した家兎を用いて体外循環を行ない、回路中の石英ガラス管を通して $6,400 \mu\text{W}/\text{cm}^2$ の強度の紫外線を照射した。ヒツジ赤血球に対する抗体価の測定ならびにリンパ球のPHA反応、Spontaneous blastogenesisを行ない、紫外線の免疫抑制効果について検討するとともに、末梢血液中の赤血球数、白血球数、血小板数の変動も観察したのでこれを報告した。

質問 (微生物) 吉岡 守正

照射日を第1回SRBC注射日より前に行なった方がよくないか？

応答 (腎外科) 水口 潤

UV照射日は1、5日目です。UV照射はSRBC投与何日前ぐらいがよいでしょうか？

(微生物) 吉岡 守正

ケースバイケースです。

8. 腎の体外手術6例の経験

(腎センター外科)

○中沢 速和・高橋 公太・東間 紘・光野 貫一・瀧之上昌平・八木沢 隆・本田 宏・須藤 尚美・寺岡 慧・阿岸 鉄三・吉田美喜子・太田 和夫

われわれは、従来腎摘の適応とされていた腎血管病変などに対し、積極的に体外手術を行ない、自家移植

を行なうことにより、腎を保存的に治療するように試みている。

今回、われわれは、当センターにおいて施行された6例の自家腎移植例について検討を加えたので報告する。

症例は5～67歳までの、男子4例、女子2例で、疾患は腎動脈瘤2例、腎血管性高血圧症(腎動脈狭窄)2例、腎結石1例、骨盤腎1例であった。

温阻血時間は4～40分であるが、腎血管病変4例では4～6分であった。血管奇形を含む骨盤腎、炎症の高度な腎結石例がそれぞれ40分、20分と長時間を要した。

総阻血時間30分～270分、平均195分であり、その間の腎の保存は、単純冷却2例、低温持続灌流4例であった。

術後の成績をみると、腎動脈瘤の2例は、合併症もなく、1年以上経過して腎機能は良好で腎動脈瘤も消失している。

移植腎摘は2例に施行されており、1例は腎動脈狭窄の症例で、血圧の降下には有効であったが、移植腎動脈狭窄のため7カ月目に移植腎摘出を施行している。他の1例は、腎結石の症例で、腎盂腎炎をくりかえし、移植腎機能低下のため、1年2カ月で摘出している。

死亡例は1例で、67歳と高齢で、術後急性腎不全となり、24日目に死亡している。

現在、腎の体外手術、自家腎移植は腎動脈瘤、動静脈瘻、動静脈狭窄などの血管病変の他、腎外傷、腎奇形、腎結石、腎腫瘍などに対し適応があると考えられている。

われわれの症例においても、腎動脈瘤などに対し、非常に良好な結果を得ているので、今後、適応を充分考慮し、更に症例を重ねて検討を加えてゆきたいと考えている。

9. 膠原病診断におけるLupus Band Testの意義

(腎センター内科)

○柚木 雅至・佐中 孜・小俣 正子・塚田津夏子・菊池 典子・杉野 信博
(皮膚科) 尾立 冬樹・肥田野 信

Lupus Band Test (LBT) は皮膚生検によって得られた組織片を通常の直接蛍光抗体法により染色し、真皮と上皮の接合部の染色性の有無を検討する方法である。一部の疾患を除いては、SLEにきわめて特異的であるとされているが、その診断学的意義はいまだ確立